

東京洋傘

林 康 明



憧れて飛び込んだファッションの世界。
惚れ込んだ「ラムダ」の傘を守り続ける為、
今日も作業台へと向かう。



一つの木型が出来上がるまでに厚紙で幾度も試作を繰り返す。紙には前回と今回の数値が書かれ、修正の過程が一目で分かるようになっている

洋服に魅せられた半生。 その集大成となる 洋傘を

上/切り出した生地を、柄が繋がるように縫い合わせる 下/縫い合わせられた円になった生地。この後、親骨に手作業で縫いとじていく



使命感に背中を押され 洋傘職人の道へ

創業は昭和二十二年(一九四六)、紳士用服飾小物を多数展開するのみならず、男性用のファッション傘をいち早く製造したことで知られる「市原」で、洋傘製造の責任者を務める林康明さん。昭和六〇年(一九八五)の入社当時から営業ひと筋。札幌、仙台、金沢、大宮、横浜、大阪、神戸、博多…、津々浦々の百貨店や紳士用品店を巡る日々を送った。

学生時代から頭の中は洋服のこぼれと語り、と語る林さん。愛媛県で過ごした学生時代に魅了されたのは、「世を風靡したアイビーやヨーロッパのスタイル。「ファッション誌『MEN'S CLUB』を飽きずに何

度も眺め、晴れて高校生になったらバイト代を握りしめては松山や今治のショップへ通う。店に入り浸って店長と仲良くなって…、ファッションこそが生きがいでした」

天職にも思える営業職から職人の道に進んだのは五二歳の時。オリジナルブランド「ラムダ」の傘を手掛ける職人が病に伏したことがあった。「その職人さんも既に八〇歳近く。十年後、うちの傘はどうなるのかと焦燥感が募りました。元々手先は器用だったこともあり、今の会長(奥田正子さん)の『職人にならなにか』という誘いを受けた時に、^{はら}肚をくくろうと。ラムダの傘を残したい、それだけでいいね」

必死な想いが伝わったのだろう。研修として二カ月を過ごした協力工場では、工場長自ら傘作りの工程



「うちの柄物の傘は、ネクタイに雰囲気似ているものが多いでしょう? 雨の日のおしゃれとして楽しんでいただけたら」と林さん

の全てを教えてくださいましたという。取材中「普段は見せないんだけど」と見せてくれた当時のノートは小さな字で埋め尽くされ、林さんの熱意が立ち昇るようだった。

その後、様々な傘を手本に、自身で研究と試作を重ね、独学で腕を磨き続けた。理想は一つ。これまで愛し続けてきたラムダの傘だ。「うちの傘の特徴でもある『谷落ち張り』は、骨と骨の間で生地をくぼませ、谷のように張る技法。独特のアーチが傘のシルエットに表情を

加えてくれます。通常の張り方と比べると必要な生地も多く、骨と生地にテンションをかけて『谷』を作るので、生地の伸びを厳密に把握しなければなりません。これがなかなか難しく、初めの頃、サンプルをしばらく置いておいたら、生地が伸びて傘の形が変わっていたこともありました(苦笑)」

理想のシルエットを求め、五度、六度とミリ単位の修正を重ねた型で、一枚ずつ生地を切り出していく。これも生地の柄合わせの為に必要なひと手間だ。「私の人生の集大成が洋傘だと思っています。傘作りを始めた頃は、『ラムダ』を名乗れるだけの傘ができるのか常に重圧を感じていましたが、ようやくあの頃思い描いた腕に近づけたかな」と林さんははにかむように笑った。

はやし やすあき ●
1960 年生まれ。
2019 年、東京都伝統工芸士に認定。
東京都中央区日本橋茅場町 2-17-9